

AIWFF2010 デイリーニュース

9月10日
金曜日

あいち男女共同参画財団
企画協働課内
電話 (052)962-2512
http://www.aiwff.com

明日・明後日 チケット情報

▼売行き状況
○余裕有、△残少、×完売
※…観客賞の投票有
▼9月11日(土)
⇒ウィルホール
○「ヴィヨンの妻」(10:00)
○「隠し砦の三悪人」(13:30)
○「ハート・ロッカー」(18:30)
⇒大会議室
○「映画の肖像 黒澤明 大林宣彦
映画の対話」(10:00)
○「ブレスド」(14:30) ※
○「大誘拐」(18:30)
▼9月12日(日)
⇒ウィルホール
○「ディア・ドクター」(10:00)
○「ブレスド」(14:00)
⇒大会議室
○「坡州(パジュ)」(10:00)
○「ミスにんじん」(14:00)

新進女性監督と語るトークサロン開催

本日17:00より
ウィルあいち3階

本日午後5時から日本の新進女性監督3名をゲストに迎えて、参加者の皆さんとフレンドリーに語り合うトークサロンを開催します。
ゲストは、昨日上映した短編作品、「嘘つき女の明けない夜明け」の熊谷まどか監督、「ホールイン・ワンダーランド」の清水艶監督、「アンダーウェア・アフェア」の岨手由貴子監督で、各監督は脚本も手がけています。
昨日の作品上映後のゲストトークでは聞けなかった制作のエピソードや次回作の展望など、直接

聞くことができるかも。
コーディネーターは、当映画祭プロデューサーの玉山哲郎が務めます。
昼間と夕方の作品上映の合間を利用した入場無料の交流イベントです。是非、ご参加ください。
▼日時 9月10日(金)17:00～18:00
▼会場 ウィルあいち3階会議室5
▼定員40名
▼入場無料
※定員になり次第締切り



熊谷まどか監督

大阪府生まれ。学生劇団を経て、京都の小劇場で活動。卒業後、CM制作会社に制作進行として3年間勤務。その後は、百貨店契約社員、コールセンターオペレーター、雑貨店販売員等多くの職業を経験。2003年ニューシネマワークショップにて制作活動を開始、実習作品『ロールキャベツの作り方』がPFFアワード2005ベストエンタティメン



清水艶監督

1983年生まれ。2006年に大阪芸術大学・映像学科を卒業。在学中は関西のインディーズ映画作品に多数参加。卒業制作作品『シェアリング』が第7回JCF学生映画祭でグランプリを受賞。夕張国際学生映画祭、ハンブルク日本映画祭などで招待



岨手由貴子監督

1983年長野県生まれ。大学在学中の2003年より ENBUゼミナールで篠原哲雄監督に指導を受ける。同校で制作した短編『コスプレイヤー』が水戸短編映像祭、ひあフィルムフェスティバルに入選。08年長編『マイムマイム』がびあフィルム

映画祭二日目 8作品上映、監督7名が登壇し想い語る

昨日、映画祭二日目は、台風一過で晴天が広がり、会場は多数の参加者で賑わいました。上映作品は、「坡州(パジュ)」始め8作品で、同作品のパク・チャノク監督、「プリンセス マヤ」のテレサ・ファビク監督、「母の道、娘の選択」の我謝京子監督、「あぜみちジャンピンツ!」の西川文恵監督、日本短編監督3名が登壇。各監督が

ら制作のキッカケや作品への想いなどが熱く語られ、会場からの質問も多数寄せられ、活発に意見が交わされました。

「坡州(パジュ)」パク・チャノク監督

午前10時からのウィルホール、「坡州(パジュ)」上映後、パク・チャノク監督は、まず、作品のテーマについて、「切ない愛を描こうとしたものではありません。愛情深く接してくれるお義兄さんを、主人公のウンモはいくども裏切っています。」と、むしろ「裏切り」がテーマと言明。
そして、「今回の作品では、ユダがキリストを裏切ったように、あるいは子が親を置き去りにするように、今のままでも平和に生きられるのに、なお事件をおこし、愛情深く接してくれる相手を裏切ってしまう人物を描きたかった。」と制作意図を語りまし

た。
監督から予想外のコメントを受けて、観客からは、入り組んだストーリーについて、多くの質問が寄せられました。義理の兄妹の恋愛に関する質問には、「韓国では、そういった恋愛に対して、日本よりも強くタブー視がされています。あってはならない、というモラルが強く、実際にこのようなことがあるということも聞いたことはありません」と、パク監督は丁寧に答えました。
最後に、パク監督が、改めて作品を見た感想として、「今見ると、確かに非難されてもしかたないくらい、難解なストーリー展



「あぜみちジャンピンツ!」西川文恵監督

午後2時からのウィルホール、「あぜみちジャンピンツ!」上映後、本作が自身初の長編映画だという西川文恵監督が登壇。
「私は、ロンドンの学校で映画を学ぶ中で、マイノリティである経験が多々した。他者との関わり合いをどうやっていくか考えたという自身の体験から、異文化コミュニケーションを自分の作家のテーマとして掲げていきたいと思った。」を制作のきっかけを紹介。
「タイトルにもある「あぜみち」は、雑草が生えていたりして、決して面白いものではないで

すよね。実はオープニングでのあぜみちを歩くシーンでは、主人公の優紀はどこかしょぼりと歩いていて、周りを歩いている小学生に追い抜かされていたのですが、エンディングの同じあぜみちのシーンでは元気にスキップしていて、つまらないものだった「あぜみち」が美しい景色として広がっているのです。こうして描くことで、少女の成長を表現しました。」とタイトルへの想いに言及。
さらに、この作品の特徴のひとつとして、無音のシーンが多いことについて、「これは耳の聞こえない優紀の視点からみ

たものです。そして、優紀と健聴者の麗奈が夜の倉庫で踊るシーン、この言葉のない会話は特に観ていただきたい部分です。」と観客への期待も語りました。



「母の道、娘の選択」我謝京子監督

午前10時の大会議室、「母の道、娘の選択」上映後、我謝京子監督は、「「茶道、…道、子育て道」のように、決められたような母の生き方に息苦しさを感じ、好きな仕事も暮らしも大切にできる環境を求めて、ニューヨーク(NY)で娘と二人暮らしをはじめた。」と渡米の経緯を説明。
そして、「9.11を経験し、いろいろな人の助けを受け、連帯を強く感じた。NYの人たちは、よい意味での「おせっかい」をやいてくれる。現在では、外の世界から日本を見て、経験を積む中で、育ってきた環境や

日本 のよさも再発見している。」と制作のきっかけやNYの生活に言及。
そして、「NYで力強く生きている日本女性のドキュメンタリーを創ろうと、30人以上の女性やパートナーに取材した中から、本作品に登場している女性にフォーカスした。」とのこと。
最後に、「世界中から人が集まるサラダボウルのようなNYで、それぞれが個性ある野菜として生きている。ひとつの文化のみに生きるのではなく、2つ3つと併せて新しい生きやすい文化を創っていければいいので



「プリンセス マヤ」テレサ・ファビク監督

午後2時からの大会議室、「プリンセス マヤ」上映後、テレサ・ファビク監督が登壇し、制作のきっかけやマヤに関する質問に答えました。
制作の経緯について、ファビク監督は、「頭で考えてこのようなストーリーを組み立てたわけじゃなくて、直感や情熱で作った。夢を持ち、もっと大きくなりたいと願う二人の女性に惚れ込み、二人に自分を投影して情熱を注ぎながら制作しました。マヤとエリカは私に似ている部分がある。」とコメント。
マヤ役のカastingには苦労があり、監督は「有名女優で

は、この役を出来る人はおらず、全国津々浦々、20都市を回り18歳の太っちょのお嬢さんを探し出した。」と語りました。
さらにマヤ役の俳優サンドラ・アンデションの印象について「オーディション会場で、彼女は入ってくるなり謝ってばかりでした。準備不足ですみません、メイクをしていなくてすいません、と、4回の演技テストを通し彼女に決めましたが、私は初めて会った時から彼女になるとわかっていました。」と劇中同様ダイヤの原石を見つけた時のことを振り返りました。
監督は現在、より多くの観客に

観てもらうため、スウェーデンを飛び出し米国で映画制作を行っており、次回作が期待されます。



日本短編3作品 熊谷まどか、清水艶、岨手由貴子 各監督来場



午後6時30分からの3作品の上映後、各監督から制作当時を振り返りながら、作品についてコメント。
「嘘つき女の明けない夜明け」の熊谷まどか監督は、「今回の映画は不倫がテーマだが、不倫が良い悪いではなく、それぞれの立場があるので、自分に正直に生きることが必要。だから、みんな自分がしたことを信念を持って進んで生きたい。反響が大きく好き嫌いが分かれる作品

ではあるが。」とのこと。
「ホールイン・ワンダーランド」の清水艶監督は、「今回の映画は、大阪芸術大学を出たというプレッシャーはなかったが、プロのスタッフの方もいたので、その人から「監督」と言われると少し緊張した。」とのこと。また、「主人公のチイちゃんは、初めての35mmフィルムに慣れなかった様子でしたが、少し指導したらすぐに理解してもらえたとし、おじいちゃん役の方も快く引き受けて

もらった。」と出演者の協力にも感謝。
「アンダーウェア・アフェア」の岨手由貴子監督は、「もともと、今回の映画は女性のセクシャリティーを描いたもの。主人公は、学生の時は、女性の性に目覚めていないが、一方で妹は女性を意識していて自分と違っていることを思い知らされる。大人になった主人公はマンネリな生活のせいでセクシャリティーを忘れていたが、若い男

性とのやりとりでまた女性という性を思い出す。」という作品の筋書きを説明。
最後は、3人とも、「今後は、長編映画を撮りたい。」と大きな目標である長編映画の制作に向けて意欲的に語りました。